

修士論文（要旨）

2012年7月

日本文学作品に描かれた高齢者像の分析

— 文学作品と社会の関わりを視点として—

指導 長田久雄 教授

老年学研究科

老年学専攻

210J6901

城戸 亜希子

序章.....	1
第1章 高齢者が描かれた文学作品.....	3
第1節 先行研究.....	3
第2節 本研究の目的と意義.....	4
第3節 研究方法.....	5
1 研究対象.....	5
2 研究方法.....	5
第2章 1940年代 理想と現実の高齢者像.....	6
第1節 理想の高齢者像.....	6
1-1 婦人雑誌の役割.....	6
1-2 獅子文六「おばあさん」.....	6
1-3 理想の高齢者像と文学作品の教科書的作用.....	9
第2節 現実化された高齢者像.....	10
2-1 丹羽文雄「厭がらせの年齢」.....	10
2-2 疎外される高齢者.....	13
第3章 1950年～1960年代 価値観の変化とサラリーマン社会.....	15
第1節 中高年齢期の危機.....	15
1-1 価値観の変化.....	15
1-2 高齢者を取り巻く環境.....	16
1-3 石川達三『四十八歳の抵抗』.....	17
1-4 中年期の危機.....	20
第2節 世代間の断絶.....	24
2-1 高齢者の受難期.....	24
2-2 石川達三『愛の終わりの時』.....	25
2-3 女性の生き方と時代の変化.....	29
第3節 定年退職とサラリーマン小説.....	30
3-1 定年退職の問題.....	30
3-2 『停年退職』と『孤舟』.....	32
3-3 「日常的な非現実性」の原則.....	36
第4章 1970年代 社会福祉時代の到来.....	39
第1節 道徳論から社会問題へ.....	39
第2節 有吉佐和子『恍惚の人』.....	39
第3節 『恍惚の人』が与えた社会的影響.....	41
第5章 1980～1990年代 積極的な高齢者と美しい老い.....	44
第1節 介護小説の登場.....	44
第2節 南木佳士『ダイヤモンドダスト』と吉目木晴彦『寂寥郊野』.....	44
第3節 介護社会と美しい老い.....	45
第4節 佐江衆一『黄落』.....	46
第6章 2000年以降 高齢者という年齢の枠を超えた存在へ.....	48
第1節 老年期の性の解放.....	48
第2節 渡辺淳一『エ・アロール それはどうしたの』.....	49
第3節 青山七恵『ひとり日和』.....	53
第4節 川上弘美『センセイの鞆』.....	55
第5節 現代社会が求めているもの.....	57
終章 まとめ.....	59
参考文献	
資料	

1. 本研究の目的と意義

有吉佐和子の『恍惚の人』は大ベストセラーとなり、それまであまり知られていなかった高齢者の介護問題を社会に問題提起し、その後の高齢者福祉の推進に大きく貢献したことで知られている。このように文学作品には作品そのものが芸術として高く評価されるだけでなく、広く読者や社会に影響を与えるものがある。一方で、文学作品は時代と社会、読者が存在して生まれるもので、その時代の社会や人々を反映しているとも言える。文学作品と社会は互いに影響を与え合いながら、変化を遂げているのである。

そこで、本研究では、高齢者や老いの問題が描かれた社会性の高いベストセラー作品を取り上げ、それぞれの作品に描かれた高齢者像を文学と社会との関わりを視点として分析し、文学作品が果たした役割や社会的機能を明らかにすることを目的とする。文学作品は、現代社会に内在する高齢者の問題領域や今後の新たな社会の方向性、問題解決の糸口を提供できると考える。

2. 研究対象および研究方法

- 1) 研究対象：高齢化問題や老いが主題となっている文学作品の中から、ベストセラー作品を中心として、特に社会的影響力が大きいと考えられる作品、高齢者に関する社会的規範、制度を形成する上で重要な役割を果たしたと思われる文学作品を抽出し研究対象とした。
- 2) 研究方法：対象とした作品を同時代の言説と比較しながら文学と社会との関わりという視点で分析し、文学作品が社会において果たす機能と役割について考察した。

3. 結果 まとめ

1) 1940年代

家庭小説は、戦時体制下における国策小説に姿を変え、女性たちを戦争協力へと導き、高齢者を理想の人物像に仕立て上げ、高齢者を中心に家を守ることを潜在的に意識づけする教科書的作用を果たした。敗戦による貧困は小説のなかで、高齢者を理想の人物から無用な化け物へと変化させた。

2) 1950年代～1960年代

寿命が急速に延び、価値観が大きく変化した。文学作品は、時代の波に逆行する「老い」の訪れに戸惑う人々の抵抗を浮き彫りにし、社会や人々の潜在的な願望である「自由」や「逃避」を文学の中で実現可能とした。

3) 1970年代

『恍惚の人』は介護を中心とした高齢者の問題を大きな社会問題として浮上させ、その後の高齢者福祉の推進に大きく貢献した。若い世代には老残の恐怖を植え付け、高齢者は社会的弱者として位置付けられた。

4) 1980年代～1990年代

介護社会と介護文学はそれまでの「いかに生きるか」という考えから「いかに老いるか」という問題を人々に投げかけ、「美しく老いたい」という人々や社会の願

望を浮上させた。

5) 2000年以降

高齢者には不要、無縁と考えさせられてきた「性」や「恋愛」への欲望が文学によって解放され、高齢者を取り巻く環境や社会の大きな変化を文学作品が示した。

本研究を通して、文学作品は、社会や人々の思考や行動を変える原動力となり得ること、そして、文学は時代を越えて常に「いかに生きるか」ということを問題提起してきたことが明らかになった。「老い」は「生」の延長上にある。急速に高齢化が進む日本において、今後ますます「生」と「老い」は深刻な問題になると考えられる。様々な社会的機能を果たしながら、文学作品は、人と人、人と社会とを結びつける架け橋となり、今後も深く社会と関わり続けると考える。

本研究は文学作品と社会との関わりについて、大局的な流れをつかむものに留まったが、相互の影響等、実証的な研究方法の確立と、より詳細な分析、海外文学との比較等が今後の課題と考える。

以上

文献

- 1) 朝日新聞 9.15 朝刊 社説. (1972) .
- 2) 樋口恵子:老化とはなにか 文学にみる老人像. 老人問題, 7(4) : 47-50 (1982).
- 3) 朝日新聞 11.4 夕刊 ぼっくりさん. (1972).
- 4) 内閣府:高齢社会白書. 平成 23 年版.
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2011/zenbun/pdf/1s1s_1.pdf
- 5) 袖井孝子: 老年文学と老人の生活. 群像, 45 (10) : 278-282, (1990).
- 6) 水田宗子: 老いをめぐるブックガイド. 小説 tripper, 春季(3) : 65-72(1998).
- 7) 斎藤美奈子: 物語に読む「おばあさん」. 小説 tripper, 春季(3):4-11(1998).
- 8) 上野千鶴子: 上野千鶴子が文学を社会学する. 65-113, 284-285, 朝日新聞社, 東京 (2000) .
- 9) 至文堂編 国文学 解釈と鑑賞. 54(4) (1989).
- 10) 大鹿貴子 : 老いと文学. 昭和文学研究, 58(03):73-77(2009).
- 11) 黒井千次: 性の世界 謎の奥行き. 新潮, 93 (4) : 190-196(1996).
- 12) 赤尾利弘: 『榎山節考』 <深沢七郎>. 国文学解釈と鑑賞, 54 (4) : 69-73 (1989).
- 13) 中島賢介: 『榎山節考』と『蕨野行』に関する比較考察. 北陸学院短期大学紀要, 33 : 29-37(2002).
- 14) 水野裕美子: 日本文学と老い. 新典社, 東京 (1991) .
- 15) 加藤美枝他共著: 煌きのサンセット 文学に「老い」を読む. 中央法規出版株式会社, 東京 (1993) .
- 16) 米村みゆき・佐々木亜紀子: <介護小説>の風景-高齢社会と文学. 森話社, 東京 (2008).
- 17) 倉田容子: 語る老女 語られる老女 -日本近現代文学にみる女の老い-. 学藝書林, 東京 (2010).
- 18) 天野正子: 老いへのまなざし: 日本近代は何を見失ったか. 17, 平凡社, 東京 (2006).
- 19) 長井苑子・泉孝英: 生きつづけるということ-文学にみる病いと老い-. メディカルレビュー社, 東京 (2004).
- 20) 四方由美: 戦時下における性役割キャンペーンの変遷-主婦之友の内容分析を中心に-. マス・コミュニケーション研究, 47 : 111-126(1995).
- 21) 黒井千次: 家族という主題. 新潮, 100 (1) : 232-240(2003).
- 22) 見田宗介: ベストセラーの戦後史-社会心理史の時期区分. 新版 現代日本の精神構造. 72-85, 弘文堂, 東京 (1986) .
- 23) 山本武利: 近代日本の新聞読者層. 法政大学出版局, 東京(1981).
- 24) 中田雅敏: 四十八歳の抵抗. 国文学解釈と鑑賞 70 (4) , 123-127 (2005).
- 25) 前田愛: 大正後期通俗小説の展開(下)-婦人雑誌の読者層-. 文学 36(7), 62-76(1968)
- 26) 袖井孝子: 社会老年学の理論と定年退職, 社会老年学(1), 19-36 (1975)
- 27) 見田宗介: スクラップの幸福と悲惨-<停年退職>とサラリーマン. 新版 現代日本の精神構造, 弘文堂, 100-113, 東京 (1986).
- 28) 助川徳是: 恍惚の人. 国文学解釈と鑑賞, 54 (4) : 118-122(1989).